

文芸

◆俳句

千手仏夫々の手春日影 池田 逸子

街道は花菜明りや安房上総 伊藤 敬子

初曾孫ひな壇喜ぶ年となり 伊藤 定男

嫁しき娘の忘れひいなや飾る父 今関満喜子

真砂女の生き様語る春怒涛 魚地 照子

刻を経し雛の顔なほあえか 江森 悦子

招かれて友と童謡ひなの部屋 大谷 武彦

灯台にかすむ大島春の風ぎ 川島 孝夫

早春や吟行のバス真砂女館 桑名 大行

成田山鬼も一緒に豆撒きぬ 向後 寛

笛の音のおぼろ顔くや雛の部屋 越川 福子

ゆったりと妻と会話の春炬燵 小松 藤男

団子屋の文字黒々と春霞 佐瀬 輝夫

猫柳流れもゆるき用水路 宍倉 道子

梅の香や法話を聞きし窓開く 玉虫 栗扇

水道の囲い取りたし余寒あり 土屋美枝子

青饅や唇につきたるみどりの葉 戸村 静華

額に入れ母の千代紙手折り雛 長谷川正子

絵手紙の紙面はみ出す春野菜 三須 通世

雛飾る母の鼻唄聞きにけり 山口 一秋

男の子膝固くして雛の前 山口 とし

白魚の忍者の如く潜きけり 渡部 和秋

◆短歌

病む人もやまざる人もひとひなに 越川 義則

照らす凍夜の月に目覚めいる 土屋 好

トラクターの道路に落とせし春泥に 高梨 キヨ

つるりと滑る午後の日和に 高梨 キヨ

やわかき太き春葱賜るいたり友の 高梨 キヨ

ころね有り難く受く 高梨 キヨ

眉根寄せ訝しむがに吾を見詰め 八角 三枝

孫おもむろに洪面となる 八角 三枝

花愛でし主婦のみ墓にいくつかの 池田 春江

花を刻みし石碑たちたり 池田 春江

見の限り波のうねりの響き合ふ 佐瀬 初音

九十九里浜に朝陽昇りく 佐瀬 初音

冬なのに夏着姿のプロデューサー 吉岡 信子

スタジオ内は温かならむ 吉岡 信子

速やかに改修終へたるテナントは 押尾 輝子

コインランドリーとなりて旗上ぐ 押尾 輝子

海ほたるのサーピスエリアタ暮れて 西山満里子

螢思はず電飾灯る 西山満里子

誘ひてくれたる吾息と雨の中 田崎 尚美

映画館へと連れ立ちて来ぬ 田崎 尚美

里の友数多集える十九夜請 平山 芳子

別れを惜しみ共に唄ふも 平山 芳子

息が娶り姑となりたる今にして 芹川 初子

義母の心の裡を思へり 芹川 初子

返信の合格通知に貼る切手 島田ますみ

桜の花の凶柄と決めぬ 島田ますみ

こうほう博物館

vol.13

中台の庚申塔

町の西部にあたる中台の大宮神社入り口の道端に、怖ろしい形相をして邪鬼を踏みつけた像を浮彫した石仏が立っています。これは庚申塔と呼ばれる石塔の一種で、町内各地に立っているのを見ることが出来ます。

庚申講が行われた何回目かの記念として、庚申塔を講の仲間が資金を出し合って建立しました。今日ではほとんど庚申講は行われなくなり、庚申塔自体の由来も人々の記憶の中から消え、省みられることが少なくなりました。

この庚申塔は江戸時代の昔、集落で庚申講を行った時の記念として、建てられたものといわれています。庚申講は六十日ごとにやって来る庚申の日の夜、人の体の中にいるサンシの虫が、人が眠っている間に出てきて、閻魔大王の所へ行つてその人の悪行を告げるといふ、仏教の教えがあり、人々はサンシの虫が閻魔大王に悪行を告げるのを防ぐため、庚申の日の夜は村人が集まって、一晩を飲食や話しをして眠らずに過ごす集會が庚申講と言われました。その

中台の庚申塔は、笠を載せた塔婆形で、長方形の正面中央に邪鬼を踏みつけた青面金剛、台座の下には三猿が彫られた典型的な形で、高さが一九〇cmを測り、享保十一（一七二六）年の年号が読み取れ、砂岩で作られ、町の指定文化財になっています。



▶ 中台の庚申塔